

▲▲▲ 忘れ得ぬ二つの山 O君とM君に捧ぐ ▲▲▲

矢澤 昭文

■その1 聖岳

山頂に続いているはずのザレたジグザグの山道を、5分ほど上っては5分ほど休むということを繰り返していたが、とうとう動けなくなってしまった。こんな斜面ではテントは張れない。O君が「ちょっと見て来る。」と言い、上に向かいガスの中に消えた。しばらくして戻って来て「あと高さで30mくらい。」と言い、自分の荷物を担いで再びガスの中に消えた。空身で戻って来て、今度は私の荷物を担いだ。「矢澤さん、立てる？」と言う声に、何とか立ち上がった。空身になってもペースは一向に上がらない。

山頂に着いたのはいいが、またへたり込んでしまった。O君がザックからテントを出して張っていた。私はうつらうつらしていたようだ。「矢澤さん、テントの中に入ろう。」と言う声に我に返った。目の前のテントに入るのも促されてのことだった。中には既にシュラフも出ていて、雨具を脱ぎ登山靴を脱いでシュラフに入った。

それからどれくらい経ったのか分からなかったが、登山靴で岩場を歩く音に目を覚ました。今から40年ほど前の一般的な登山は、一年中皮の登山靴を履いて登っていたのだ。軽登山靴という物がなく、いや、ひとつだけビニールかナイロンで作られたキャラバンシューズというのがあり、夏はそれを履いている者もいたが、普通は夏でも冬でも同じ登山靴だった。夏は暑く重く、冬は保温性がなく、それでも登山は楽しかったのだ。

今でも重登山靴で岩場を歩くとゴツゴツとした音が出るが、その音を耳にしたのである。O君に「おい、誰か来たぞ。」と言うと「こんな夜中に誰も来んですよ。」との返事だった。私は発熱していたのか、O君がテントの外にタオルを出し、ガスで湿らせては私の額に置いてくれていたことは覚えているのである。その他の記憶はほとんどない。

テントの中が明るくなり私は目を覚ました。天気が気になりテントの外に顔を出すと、目の前数十cmの所に遭難慰霊碑があった。昨夜は、確かに誰かが来たのだと思った。周囲にガスは残っていたが晴れ間があった。きょうは晴れると思ったが下山することに決めた。朝食を摂りテントを撤収して、その慰霊碑にキャラメルを供えて聖平まで下りた。そこからは、記録によると赤石ダムへ向かって沢沿いのルートを下りたようだ。その時には私の身体は回復していて、縦走を止めたことが惜しいほどだったが、とにかく下りようと思っていた。その日は井川の民宿に泊まり翌日東京に戻った。話はこれで終わりではなかった。

24歳の夏、O君と南アルプスの南部、茶臼岳から入山し、聖岳、赤石岳を経て荒川岳に至り下山するという計画を4泊5日で立てた。一日目は畑薙湖から入山し、茶臼小屋のテント場に泊まった。そして二日目は聖岳を越えて兎岳の避難小屋か、その先の百間洞のテント場まで行く予定だった。O君とはその1年前の夏に、八ガ岳の本沢温泉で知り合った。二人とも山小屋のバイトのためにそこに来た。3歳年下のO君は、実家のある兵庫県の工業高校に通う3年生の生徒だった。妙に馬が合った。そして高校を卒業すると、デザインを学ぼうと専門学校に通うために東京に出て来た。何度か一緒に山に登るうちに、O君と一緒にならどこでも登れるという自信が生じた。それが油断になったのかも知れない。

民宿でO君が語った。私が「登山靴の音がする。」と言った時には何とも思わなかったO君だったが、次第に私が苦しそうにするので「南無妙法蓮華經」と唱え出した。ところが、それを唱えると同時に、私が苦しそうにウーッと唸ったらしい。『あれっ、矢澤さん聴こえとって俺を驚かそうとしている』と

思い、今度は声に出さずに心の中で「南無妙法蓮華経」と唱えたところ、やはり唱えると同時に、私が苦しそうに唸り、その時はさすがに怖くなったという内容だった。

山行の二日目のその日は朝から曇り空だった。聖平に着く前から、雨がしとしとと降ってきていた。既にテントを張っていたパーティが何組かいた。それらを眺めながら雨具を着て昼食を摂った。日程を考えると聖岳を越えておきたかった。その時点では体調は悪くなかった。天気だけが不安だった。先に進むことにしてザックを背負った。しばらく上ると雨が少し強くなった。山道の脇にテント一つなら張れそうなスペースがあった。ここにテントを張ることにしてザックを下ろした。まさにその瞬間、ガスが消えた。私の目の前に大きな山塊が現れた。思わず「おい、山が呼んでるよ、行こうや。」と私が言った。再びザックを担いで歩き出した。そしてバテたという感覚がないまま動けなくなった。ただ力が出なくなった。

霊とかそういったことに対して、信じるとか信じないとかということではなく、元来関心がない。この時も霊が来たのかどうかということには、今でも関心がない。ただ、事実として、私は確かに誰かに呼ばれたのだと思う。この山行の前の一週間は、工場で夜勤をしていてその疲れはあったのだと思う。O君がいなければ、呼ばれてそっちへ行っていたのかも知れなかったと思っている。

命の恩人のO君は、その後兵庫県へ帰りデザイン事務所を自営していた。数年に一度は東京や名古屋で会った。私の家に来たこともあった。20年ほど前の12月、病死したという連絡があった。突然のことで混乱したまま、東名高速道路を走り葬儀に参列した。そして今は京都のお寺に眠っている。

■その2 天狗尾根

20数年前に愛知国体があり、山岳部門が鳳来町(今は新城市)で開催された。クライミング競技のために、やまびこの丘に人工壁が建立された。

競技が終わり、その壁でクライミング講習が開かれ参加した。講習会の後で『せっかくクライミングを習ったので山岳会を作ろう』という呼びかけがあり、それに賛同した。立ち上げた会の名前は「鳳来クライミングクラブ・HCC」だった。そのメンバーにM君がいた。M君は滋賀県彦根市出身だったが、新城市内の肥料会社に勤めていて鶏やその卵の研究等をしていた。会社の寮を訪ねると、部屋のドアに「山岳部」と書いた紙を貼っていた。気のいい素朴な人間だった。

1998(平成10)年12月12日、そのM君と金田さん、金田さんの御主人、そして私の4名は、早朝、それぞれヘッドランプを灯し暗いうちに八ヶ岳の美し森を出発した。天気がとても良くて明るくなると快晴の空が広がっていた。これなら天狗尾根を抜けて赤岳頂上に達し、真教寺尾根を下りることも可能ではないと思ってしまった。

地獄谷から天狗尾根へ上り岩尾根を辿って行った。12月の中頃だというのに雪はほとんどなく、アイゼンを着けることもなく大天狗の岩壁に至った。そこを難なく通過し、積雪が現れたのでアイゼンを着けた。尾根は徐々に高度感を増してきた。やがて核心部の小天狗の岩壁の基部に着いた。数mの垂直の壁だった。この壁に雪は付いてなかったが、アイゼンを着けたまま登ろうと決めた。M君だけはアイゼンを外して登ると言った。ここで初めてロープを出し、私の確保で、先ず金田さんに登ってもらった。次いで金田さんに確保をしてもらって私が登った。そして私が確保してM君がノーアイゼンで登ってきた。外したアイゼンをザックにどのように結びつけたかは分からないが、壁を登っている時にそのアイゼンが真逆さまに落下していった。サレワのアイゼンだった。小天狗を越え、一旦ロープを使って下降し一般の山道の合流した。そこからは雪があった。M君以外はアイゼンを効かせて赤岳頂上へ向かった。M君もツボ足で進んだがすぐにバテてしまい動かなくなってしまった。初めて聞いたのだが、糖尿


の気があり血糖値が下がることがあり、常にオレンジジュースを携行している。今も持っているのをそれを飲めば大丈夫だと言う。M君の回復を待ち、再び頂上へ向かって登り出した。午後5時に赤岳に至った。素晴らしい天気です晴しい景色が広がっていた。しかし日が短い時期である。薄暗くなっていた。ここからただちに下山しなければならない状況だった。

真教寺尾根は急峻だった。アイゼンを着けていれば爪を効かせてピッチ良く下れるが、M君はアイゼンがない。先頭に行く私はクサリを掘り起こし、雪面に深く足を突っ込み、M君が滑らないように指示しながら進んだ。時間のかかる作業だった。ヘッドランプを灯しての行動だった。急坂を過ぎ樹林帯に入りホッとしたのもつかの間、樹林帯では雪に覆われた登山道がさらに分からなくなった。とにかく尾根を踏み外さないようにと進んだ。皆がバテているのが分かるが私もバテていた。どこかでビバークしようかという思いもあったが、前に前に進んだ。午後10時40分に美し森の駐車場に着いた。18時間の行動となった。天気がずっと良くて幸運だったと思っている。

そのM君は、翌年の夏に沢で遊んでいて、滝から転落し内臓破裂で亡くなってしまった。私にとっては悔いの残る事故だった。なんであんな所でという思いが今もある。M君は故郷の彦根城が見えるキリスト教会の納骨堂に眠っている。

自分より若かった二人の山友を亡くし人生観が確立した。生きている者は一生懸命生きなければいけない。人生は一度きり、いつどうなるか分からない。自分の心のままに生きよう。

(完)

特集記事目次画面に戻るには、画面最上段最左側の「戻るボタン」で戻って下さい